

査読研究ノート

「賀川豊彦宛天羽英二書簡」を読み解く

浜田 直也*

要旨

論考の対象の書簡は、賀川豊彦宛天羽英二書簡である。1939年2月27日、ジュネーブで天羽が認めて賀川に送ったものである。書かれた理由は、賀川への天羽へのメッセージに対する天羽からの返礼である。そして、日中戦争の戦時下の複雑な外交情勢が、天羽をしてこの書簡を書かせたのである。管見の限りでは、この書簡を考察した先行研究はない。また、この書簡は二人にしか理解できないところがある。内容は以下の通りである。天羽は、賀川に福島牧師を紹介されたことを謝している。福島牧師とは福島重義で、彼はオックスフォードグループ運動の指導者である。さらに、天羽は、カンタベリー主教が日本による中国侵略を非難したことに怒りを露わにしている。カンタベリー主教の非難声明によって、聖公会（英国国教会）に対する包括的な外交政策は、一転した。天羽の書簡を彼の日記と対照させて理解できることは、彼が、イギリスがドイツの支援を受けたスペインの軍事政権を承認したことを喜んでいただことである。彼は、国際社会の満洲国の承認に対しても同様な思惑を懐いたであろう。おそらく、日本外務省も同じ考えであったであろう。しかし、賀川は、ドイツ人は日本人に対して差別的で危険だが、胡漢民が満洲の日本への譲渡を語っているように中国とはうまくやれる、と福島牧師を介して天羽に伝えた。ただ、胡漢民の話は賀川の誤認である。天羽は、国際連盟とカンタベリー主教の側につかないことを賀川に対して要求した。何故ならば、賀川は日本軍による中国での侵略行為を謝罪していた。天羽は、賀川にこの謝罪を止めるように願っていた。彼は賀川が日本の国策に叛くことによる賀川の身の危険性を恐れていたのであろう。端的に言って、この書簡からは、戦時下の天羽と賀川の苦悩が読み取れるのである。

キーワード

天羽英二と賀川豊彦、カンタベリー主教の日本の中国侵略に対する非難、スペインの軍事政権と満洲、賀川の中国への謝罪

はじめに

『賀川豊彦宛天羽英二書簡』（東京賀川豊彦記念・松沢資料館所蔵、昭和14年2月27日付）は、スイス特命全権大使であった天羽英二が賀川豊彦に当てた個人的手紙である。この書簡は、米

* 執筆 者：浜田直也
機関／役職：関西大学非常勤講師
機関住所：大阪府吹田市山手町3-3-35
E-mail：hamachan@m4.kcn.ne.jp

澤和一郎氏が内容の一端を紹介するまでその存在が知られていなかった¹。

はじめに、書簡に登場する天羽英二と賀川豊彦について簡単に紹介しておくことにする。

天羽英二(外交官, 1887~1968年)は、戦間期の外務省にあって広田弘毅・松岡洋右外相の側近として対中国外交の重要局面において存在感を示した外交官として知られている。また彼は賀川とは縁戚関係にありごく親しい間柄であった。

一方、賀川豊彦(牧師, 1888~1960年)は、日本のキリスト教界にあって大正から昭和にかけて、貧民窟での貧民救済にはじまり、労働組合・生活協同・農民組合・医療組合等の分野で大きな働きをなしたキリスト教社会主義者である。彼は二十世紀初期の世界世論では、ガンディー・シュバイツァーとともに「三聖人」と称賛されている。

全文を鳥瞰して、前半部と後半部で内容の性格が異なっている。前半部では、ロンドン・タイムズ社が、ロイヤルアルバート・ホールで、日本軍による中国各都市への非人道的な空爆に抗議して開催した反戦抗日集会が話題にあげられている。その際、コズモ・ラング・カンタベリー大主教(在位1928~1942年)が司会を引受け、また自らも日本の中国侵略を非難する声明文を出したことへの、天羽の憤りを披瀝したものになっている。

また、後半部では、多民族・多宗教からなるヨーロッパでは、国家間の抗争が激しく、イギリス・フランスとドイツ・イタリア間の対立が深まり、一触即発の危機に瀕していると説いている。これに比べて、日本は、天皇制を柱とする単一民族であるので国際紛争はないが、国内では貧富の格差・権力の偏狭があり、国民が一枚岩になれないと論じている。

本稿では、第二次世界大戦前夜に書かれた天羽書簡に秘められた、政治と宗教の相克を、とりわけ、日本の外務省とキリスト教徒の国家との戦争に対する政治的立場の差異を、書簡に託された天羽と賀川のメッセージを考察することで浮き彫りにする試論としたい。

第一章 「賀川豊彦宛天羽英二書簡」について

天羽英二は、外務省から駐スイス特命全権大使に任じられて、日中戦争が勃発した1937年から1939年まで、ジュネーブに滞在していた。彼のこの時期の動向については、『天羽英二日記・資料集』全3巻に詳細な記録が残されていて或る程度知り得る。

はじめに、少し長くなるがその書簡の全文を紹介すると²。

昭和十四年二月二十七日

天羽英二

賀川豊彦殿

福島牧師ニ御紹介^{かたがた}旁々御コトヅケ有難ウ 相変ラズ御活動ノ御様子同慶ニ堪ヘズ、事変モ長引クニツレ種々ノ社会問題モ起ルバク切ニ御健闘祈ル 先達テ壽府ニテ「オックス

フォード、グループ、ムーブメント」ノ連中ト親シク会談スル機会ヲ得タルハ福島牧師ヨリ御聞込ミノ次第ト思フ 同運動幹部カラモ同運動ニ就テ種々ナル話ガアツタガ 小生ハ日本ニ於テハ同運動ノ目的、趣意ヲ最モ明白ニシ置クベキ様注意シテ置イタ、右会談ノ際小生ハ「カンタベリー」大僧正ノ言動ニ言及シテ同僧正ハ「チャーチ、オブ、イングランド」ノ首長デアルガ 英国首相ニ依ッテ任命セラレ枢密院ニ議席ヲ有シアノ俗悪ナ「タイムス」ノ「トラステイ」【筆者注記 Trustee, 役員】トモナッテ居ル、同僧正ハ満洲、「エチオピア」問題、日支事変等ニモ飛出シ常ニ政治問題ニ口ヲ出シテ居ル、然シ 他方ニ於テ「チャーチ、オブ、イングランド」ヲ主宰シ 其分派ハ日本ニモアル、宗教ノ名目ノ下ニ海外ニ迄政治運動ヲナスコト云フコトニモナル、英国ハ「ナチ」ノ文化宣伝団体ノ海外設置ニ非常ナル反対ヲシタガ 同様ノ筆法ヲ以テスレバ「カンタベリー」ノ宗教団体ノ日本布教モ反対セザルヲ得ザルコトトナリハセマイカトノ話ヲシタガ 幹部ノ連中ノ中ニハ夫ハ尤モダト云フ者モアツタ

之等ノ人々カラハ今ダニ絶ヘズ手紙ガ来ルガ 同運動ノ目的ト帰趨ニ就テハ未ダニハッキリシナイコトガアル、之等ノ人々ハ貴兄ニ関スル話ヲ傾聴シテ居タ 之等ノ人々及小生ノ泊ッテ居タ「ホテル」附近ノ古本屋ニ「賀川豊彦」ト云フ佛語ノ本ガ並ベテアツタノモ面白カッタ。

欧州ハ御承知ノ通り人種、宗教、歴史乃至利害問題等ノ複雑ナル関係アリ 結局紛争ハ絶ヘサルガ 大キナ動キハ 英国ト独逸、英佛ト独伊トノ間ノ溝渠ガ段々深クナリツツアルヤウニ思フ。

翻ッテ日本ガ我民族ノ中心タル皇室ヲ有シ人種ハ単純テ人口ハ多ク増加モ激シク一般ニ活動力ニ富ンデ居ル點ハ洋々タル将来ヲ持ッテ居ル様ニ思フ、

只然シ箇人的生活標準ノ低キハ一般国富ノ関係ニ依ルモ 何トカ富ノ分配ヲ公平ニシテ貧富ノ懸隔ヲ更ニ尠クシテ庶民ノ標準ヲ高ムル必要ヲ痛切ニ感ズル、次ニ我国各方面ニ於テ相克ノ状態ヲ演出シテ居ルノハ誠ニ困ッタコトデ 我國民ハ家族トシテノ単位ニ於テハ纏ッテ居リ 又国家トシテハ一致協力シテ居ルガ 其中間ノ諸団体ニ於テ互ニ排斥反撥シ居ル事象ハ、何故カ、之ヲ匡正セズンバ到底大國民トシテ大国家ヲ建設スルコトハ難シイ之モ結局ハ物質的満足ノ不充分ナルコトニモ依ルベキガ 精神上ノ慰安ニ依リテモ幾分かハ救済セラルベキカトモ思フ 社会運動、相互愛普及ノ緊切ナル所以ヲ痛感スル、多年此方面ニ奮闘セラレ居ル貴兄ニ対シテハ、釈迦ニ説法ナルモ此際特ニ御自愛御奮闘ヲ祈ル令夫人ニ宜敷ク

在瑞西日本公使館

天羽書簡の奥付は、1939年（昭和14年）2月で、「日独伊三国同盟」締結の前夜である。ここで、天羽が、この書簡を賀川に送付した経過を確認する作業として「天羽日記」【1939年度】

を見てみることにする。「日記」の昭和14年2月24日の記述を紹介すると、

2月24日(金) 晴 暖

賀川ニ久振ニ我国相克除去 貧富懸隔解消ノ必要ヲ述ブ

この記載の日付けから、天羽が賀川宛書簡を認めた期日が書簡の奥付の2月27日ではなく、2月24日であることが確認できる。また、書簡の文面に「富ノ分配ヲ公平ニシテ貧富ノ懸隔ヲ更ニ尠クシテ庶民ノ標準ヲ高ムル必要ヲ痛切ニ感ズル、次ニ我国各方面ニ於テ相克ノ状態ヲ演出シテ居ルノハ誠ニ困ッタコトデ…」とあるのは、日記の「我国相克除去 貧富懸隔解消ノ必要ヲ述ブ」と、ほぼ同じである。両者には日付のズレはあるが、その間に考え方の変化はないことが見て取れるのである。

思うに、天羽は、2月24日に一旦賀川宛の書簡を認めたが、27日に重複した内容を残したまま、更に前半部を書き添えた文面に仕立てて送付したのではなかろうか。つまり、彼が、書き加えた前半部の文脈の中に、書簡が書かれた強い思いが込められていたのである。

第二章 福島牧師

天羽書簡の文面の冒頭に、「御紹介^{かたがた}旁々御コトツケ有難ウ」、とある福島牧師とは誰なのか。賀川は、キリスト教界の指導的立場にいて、彼と面識がある福島姓の牧師は多数いた。賀川の行動記録「身辺雑記」には、各地で福島姓の牧師に会っていることが記されている。

そこで、福島牧師を特定する作業のなかで、『基督教年鑑』の名簿で確認すると1934年頃に賀川と親交をもっていたと思われる福島姓の牧師・司祭は二人に絞られてくる。

一人は、日本メソジスト派の教会牧師の福島重義^{ふくしましげよし}(1886~1947年)で、もう一人は聖公会司祭の福島国五郎^{ふくしまくにごろう}(1888~1985年)である。

『日本キリスト教歴史大事典』によると、福島重義は、東京市生まれで1903年に受洗し学習院大学、ケンブリッジ大学に学び、渡米しアメリカ・ロングビーチ市ユニオン教会の牧師となり、帰国後は藤枝、神戸、別府、武蔵豊岡、青山(銀座)教会を牧会している。

また、福島重義は、アメリカ・メソジスト派の牧師フランク・ブックマン(Frank Buchman, 1878~1961年)が、1921年に結成したオックスフォード・グループ・ムーブメント、別称道徳再武装運動(Moral Re-Armament: MRA)と呼ばれた非宗教の国際ネットワーク活動に共鳴し日本に於けるその中心的存在となった。

福島重義には、『オックスフォード・グループ運動』という著書がある。また、彼が提唱した早天祈祷会は有名である³。

一方、福島国五郎の略歴は、広島県に生まれ大阪の「聖三・一神学校」、「旧制桃山中学」に

学び、各地の聖公会（国教会）の教会で務めた司祭である。彼には、神戸での在任期間もあり、この頃から賀川と面識があったと思われる。また、日中戦争期には、賀川と共に天皇制を翼賛する国策的な宗教儀式に加わっている。

ところで、天羽と福島牧師がスイスのジュネーヴで会談したのは、書簡の奥付から1939年2月27日の数日前である。一方、賀川の個人新聞『神の国新聞』第1042号に、国五郎は「イスターの瞑想—基督の復活—」という説教録を発表しているが、その奥付には昭和14年（1939）3月29日とあり、書簡から推定される会談日時より約1ヵ月の時間差がある。福島国五郎が約1ヵ月で帰国して教会で説教し、その説教録を紙面に発表することは、昭和初期のヨーロッパと日本間の交通事情から考えて不可能である。つまり、書簡の福島牧師を福島国五郎と推定するには無理があるのである。

そこで、賀川豊彦と福島重義の親密な交流の経緯を、「身辺雑記」（『賀川豊彦全集』第二十四巻）によって跡付けると、賀川と福島重義との拘わりは昭和3年に遡る。福島の名が登場する初見は、「武蔵川のほとりより」（『雲の柱』昭和3（1928）年1月号）である。

白杵に上って大友宗麟が築いた、亀城を見学しました。…。メソジスト教会の福島氏、米倉氏と共に、約二時間を送り、別府亀の井ホテルに迎へられ、別府の発展に驚いたことでした。

二人の親交は続き、「武蔵野の森より」（『雲の柱』昭和8年（1933）11月号）に、

最近米国やカナダなどでは、オックスフォード・グループの宗教運動が盛なので、外国からくる客までが燃えているのを見ると全く嬉しくなる。

また、同年、「武蔵野の森より」（『雲の柱』12月号）には、

十一月七日に開かれた国民更生運動の日比谷の大会も、頗る盛会であった。小平国雄氏（1884～1970年、桑港日本人基督教会・神田・代々木中部教会牧師）と福島重義氏と私の三人が話したが、皆が一堂に会することも愉快的なことである。

とある。

さらに、賀川は、翌昭和13年（1938）2月、伊豆修善寺の小学校を会場とした講演会で戦争を翼賛する『愛国行進曲』を聴衆と斉唱しているのである。

私は修善寺の駅前の小学校で、約三百五十ぐらいの聴衆に話した。始めて愛国行進曲を聴

衆と合唱した。翌日私は湯河原に帰り、オックスフォード・グループと一日を送った。

と語られている。

ここで、福島重義が共鳴したブックマンについて、その活動歴を紹介する。彼は、1938年に第二次世界大戦前に軍備増強熱に狂奔する欧州各国に対し、軍備を廃し、道徳と精神の再武装が世界の平和と繁栄の道だと主張し、道徳再武装運動(Moral Re-Ament, 略称MRA)を提唱したことで知られている。

しかし、ブックマンは、陋見な反共思想の持ち主で、ヒトラー(Adolf・Hitler, 1889～1945年)の側近のヒムラー(Heinrich・Himmier, 1900～1945年)やヘス(Rudolf・Heβ, 1894～1987年)と親交があり、1939年にベルリン訪問を終えアメリカに帰国した際、「私はヒトラーに感謝する」「神の支配するファシスト独裁に賛成だ」と語っている。

彼はヒトラーとファシスト政権を、反宗教政策を取るソ連・共産主義勢力と対峙する勇者と称賛し、その結果、アメリカの良識的な世論からは爪弾きにされている。

また、1939年頃の「オックスフォード・ムーブメント・グループ」は、「反ソ親独」主義を標榜し運動名をMRAに改称していて、この時期に天羽と福島が出会っている。おそらく、天羽は「反ソ親独」の立場から、ヒトラーの周辺と繋がるブックマンに接近することを得策と想起し、賀川に対して福島を紹介を依頼したのであろう。

ところが、福島重義が、1934年に記した『オックスフォード・グループ運動』「序文」によると、当時の「オックスフォード・グループ」の成員は、偏狭な反共主義思想の持主だけではなくオックスフォード・ケンブリッジ大学の教授と司祭からなっていたという⁴。

今日グループ運動の中心は教養と学術批評の権威を任じているオックスフォードであり、中心人物はと言えば冷静に過ぐるとまで評せらるるオックスフォードとケンブリッジ両大学の教授連と神学者であることを見逃してはならない。

これから、天羽が1939年にジュネーブで会談したという「オックスフォード・グループ」のメンバー構成は、イギリスのリベラルな思想の持主であったことになる。そうであるならば、彼はイギリスの知識人・宗教家と誼を通じ、彼らに働きかけてカンタベリー大主教の言動に苦言を呈することを期待していたとも考えられる。

第三章 賀川为天羽への「言付け」

『賀川宛天羽英二書簡』の冒頭にある、「福島牧師ニ御紹介^{かたがた}御コトヅケ難有ウ」とある「コトヅケ」(言伝)、つまり“メッセージ”とは何を意味しているのでしょうか。ただ、その賀川

からの“メッセージ”の内容については、天羽は書面では何も語っていない。

そこで、賀川の“メッセージ”を解き明かす手掛かりになる、同時期の賀川の主張が窺える資料を渉猟してみることにする。

その一つが「興亜と十字架」（『雲の柱』昭和十四年（1939）五月号）である。この書面のなかで、賀川はこの時期の胸の内を吐露しているのである。

「戦う者は疲れる」

アジア人と白人とは、いづれ衝突するに違いない。ドイツやイタリーが今こそ、日本に親しみを表わしているが、四十年前（日清戦争前後）のドイツ及び日本の関係はどうであったか、黄禍「イエロー・ペリル」を言い出したのはドイツでは無かったか。…私はアジア人と白人との将来にたらんとする大衝突は、全く不可避的のものだと思ふ。

…中略…

今から二年半ほど前（注：1934年）、私は香港で胡漢民と会った。話は、農民救済のことから産業組合に及んで、この後も支那の協同組合を指導してくれと頼まれた。この間も、彼は満洲事件（注：1931年、柳条溝事件）に関しては一言もいはず、非常に謙遜な態度で話を続けていた。で、私は彼を尊敬せずにはいられなかった。

はじめに、賀川は、ドイツ人は日本人に対して潜在的な差別意識をもっていると指摘し、日本がドイツに恃む政策を取ることは得策ではないと示唆している。彼は、「日独防共協定」（1936年11月）、「日独伊防共協定」（1937年11月）に対して危機感を覚え、さらなる、ドイツとの同盟（「日独伊三国同盟」1940年締結）に危機感を募らせているのである。

そこで、賀川は、1934年3月に香港で胡漢民（政治家、1879～1936年）に会談した際に満洲問題に話題がおよんだ回想をもとに、ドイツと結ぶ前に中国の国民党政府との直接対話の機会を模索すべきであると説いているのである。

しかし、賀川は、胡漢民の満洲問題に関する政治姿勢に対する理解で大きな誤りを犯している。それは会談の様子を伝えたなかで、“胡漢民は満洲事件に関しては一言もいはず”と記し、これを以て胡漢民は中国東北省（満洲）を日本へ帰属させることに同意したと誤った拡大解釈をくだしてしまったことである⁵。

胡漢民は、1934年3月頃、広東を離れ香港で療養生活をおくっていた。しかし、彼が公の場で満洲問題について日本に譲歩するかのような声明を出したことはない。むしろ、彼は、日中間の火種である満洲問題については、第三者的立場を取らず積極的に日本を批判する発言をしているのである。

たとえば、胡漢民は、同年3月に香港の寓居で『上海時事新報』記者の朱玉からインタビューを受けている。その際の胡漢民との朱玉の会見記録が、『民国胡展堂先生漢民年譜』（台湾商務

印書館, 1981年)に収められていて, それには次のようにある⁶。

他講到国事日危, 外患日急的時候, 幾致淚下, 一片愛國愛民的熱忱, 溢於言表, 到底老成謀國, 不同凡響. 胡先生愈談愈悲壯了, 索性從他追隨, 總理說起, 以及身經的党国大事, 由滬來港密聞, 暨最近的主張, 慷慨抑揚, 感嘆頓挫.

この部分を抄訳すると,

(胡漢民氏は), 迫りくる外患と多難を語る際にいくども落涙された. 国家・国民を愛するほとばしる熱情を言葉と表情に漲らせておられた. およそ老政治家の凡庸な対応ではなかった. (胡先生は), とめどなく語りしだいに悲壯感を極められた. 私(朱玉)の質問にやむにやまれず返答して, 總理(孫文)の話から説き起こして自身が拘わった政党・国政談を語られた. 私は, 上海から香港を訪ねて胡先生の最近の政治的見解を聞くことができ, 感動で胸がいっぱいになり心が碎けてしまった.

賀川は, 胡漢民との会談について, 国内向けには何も語っていない.

賀川が『雲の柱』(昭和九年四月号)に寄稿した旅行記「南航の四十日」には, 胡漢民との会談は記さず, 次のような旅程記録しか残していないのである⁷。

かへり道は, 香港, 広東, 上海で話をした. 広東で孫逸仙の記念堂や革命の七十二志士の墓に詣でて感慨無量であった.

ただ, 賀川が香港から広東に赴いた際に, 孫文(孫逸仙)の記念堂や革命烈士の墓を詣でたのは, 胡漢民との会談の影響があると推察されるのである.

周知のことであるが, 天羽英二は, 広田弘毅外相のもとで外務省情報局長であった1934年4月, 欧米・国際連盟の中国に対する共同援助に反対する広田外相の外交政略を非公式ながら曝しだす「天羽声明」を公開し, 緊張していた日中関係に大きな波紋をもたらした.

これに対して, 胡漢民は, 「天羽声明」に憤り, これを否定する「為遼東問題忠告友邦書」(『胡展堂先生漢民年譜』)を發表し, そのなかで東北省(満洲)を「我東北」つまり中国の領域と談論して批判しているのである.

広田声明, 惟一要求, 厥為独占遼東, 併呑中国. 去年七月, 予曾發表一文, 主張英美俄協調, 共同解決遼東問題. 本年三月, 重申此議, 期促友邦注意. …中略… 日本為確保朝鮮, 必擯俄於遼東之外, 二年来在我東北之布置, 無非以對俄為對象. 為俄計, 於遼東問題, 豈

容座視！

胡漢民の声明文の文意は、

広田声明（天羽声明）の主張は、遼東半島を占有し、中国を制圧することを目論んだものである。去年（1933年）七月、私は声明文を認めて、イギリス・アメリカ・ソ連と歩調を合わせて、遼東半島問題を解決すべきと提言した。また今年の三月にも、繰り返し主張を述べ、友好国に警戒を呼び掛けた。…中略…。日本は日清・日露戦争によって朝鮮を保有し、ソ連を遼東半島の圏外に追い遣った。ここ二年来、日本は対ソ連を理由に我が東北部の行政区域に進出してきた。日本による出し抜きの経略（満洲国建国）、遼東問題をどうして座視することが出来ようか、出来るはずもない。

敷衍して、胡漢民は、日本の満洲国建国（1932年）と国際連盟脱退（1933年）の経過を踏まえて満洲問題に対して日本に譲歩しない決意表明をしている。また、胡漢民は、1934年3月、『上海時事新報』等の新聞報道によってイギリス・アメリカ・ソ連と結んで満洲問題に対峙する立場声明を繰り返し宣言していて、売国奴の意見を述べる筈がない。

おそらく、胡漢民が、満洲事変に関して賀川に対して黙秘したのは、両者の会談のお膳立てをした介添え人、おそらく日本政府の関係者に対して警戒心を懐いていたからであろう。

彼の沈黙の真意は、日中間の平和の架け橋になろうとしていた賀川には、満洲国建国に対する怒りを押し殺してまで、彼の謝罪伝道と親善活動に期待していたからではなからうか。

賀川は、胡漢民と会談した香港、その後立ち寄った広東、上海でも日本軍による中国での侵略行為への謝罪伝道をおこない、上海では魯迅と会談している。

つまり、賀川の胡漢民に対する見解は、彼の日中戦争を回避させたい焦燥感からうまれた拡大解釈で事実誤認である。とはいえ彼は、日本のドイツとの同盟という選択肢は、日本の亡国を齎すと慮り、唯一の打開策は中国政府との直接対話しかないとする「コトヅケ」「メッセージ」を福島牧師に託したのではなからうか。

一方、天羽英二は、外交官として松岡洋右外相と同じく、ファシスト政権との同盟関係強化を外交上の得策と考えていた。彼が、この考えを思い付いた経緯は、『天羽英二日記』の1939年2月下旬の次のような興味深い記述から推察されるのである。

2月25日（土） 晴 暖

往 藤原銀次郎 賀川豊彦

2月26日（日） 晴曇 暖

英佛「フランコ」ヲ明朝承認セン 夜淋シサニ乗ジ2, 3手紙書キ

2月28日(火)

今夜英国下院ニテ労働党 英国ノフランコ政権承認不信任動議提出論争
「イーデン」政府ハ賛成シテ承認ヲ為ス ココラガ英国政治家ノ面白キ所

これから、天羽英二は1939年2月26日・28日付けの日記で、イギリス外相アンソニー・イーデン(Anthony・Eden, 1897~1977年)が、ファシスト勢力に屈し労働党の反対を押し切つてフランコ将軍(Francisco・Bahamonde, 1892~1975年)の軍事政権を承認したことに関心を示しているのである。

当時のイギリス首相は、ネヴィル・チェンバレン(Neville Chamberlin, 在任1937年5月28日~1940年5月10日)であった。ちなみに、イーデンは、チェンバレンのファシスト勢力に弱腰な「宥和政策」に疑念を持ち、1938年1月にフランコが国家元首兼首相に就任して内閣を組織した翌月に外相を辞任して閣外に去っている。

「賀川豊彦宛天羽英二書簡」と彼の「日記」から導き出される天羽英二の外交戦略は、天羽はファシスト勢力と結ぶことで、フランコ政権同様に満洲国の承認を国際社会から得るというものであった。しかし、カンタベリー大主教が満洲問題で日本に対する批判を強めることで日本にとって不利な国際世論が形成されて満洲問題を解決する糸口を失うことになる。天羽は、これを危惧する心情を書簡に認めて賀川に伝えたかったのではなかろうか。

第四章 日本外務省と聖公会

カンタベリー大主教が、『ロンドン・タイムス』の依頼に応じて、日本軍の中国での非道を糾弾する抗議集会に登場し日本への非難声明を出したことは、日本聖公会の聖職者達に大きな衝撃を与えていた。

八代崇司祭(1933~1997年)は、特高警察の資料を踏まえて『新・カンタベリー物語』を著し、カンタベリー主教の日本の無差別爆撃に対する抗議声明の内実と、それに連動する日本政府による英国国教会(聖公会)に対する抑圧と、これに拘わるイギリス人司祭の苦悩について記している⁸。

『新・カンタベリー物語』には、「ラング大主教と日中戦争—レオノラ・E・リー戦中日記より」に、当時のカンタベリー主教の言葉が残されている。その一部を紹介する。

昭和十二年(1937)ある新聞社(『タイムス』)がアルバート・ホールを借りて日本軍の無差別爆撃に対する抗議集会を開催する計画を発表した。司会者はカンタベリー大主教となっていた。…中略…集会の第一部は、日本軍による無差別爆撃の映画の上映であった。画面に映し出された軍用機を見ていて、反日抗議集会を開いているこの国(イギリス)が

陰では日本に武器を売り込んでひと儲けしていることを考えたとき、われわれ自身にも責任があるとことを感じないわけにはいられなかった。

文脈の終わりで、「この国（イギリス）が日本に武器を売り込んでひと儲けしていること」とあるのは、幕末期にグラバー商会を介して薩長連合軍がイギリス製のエンフィールド銃を購入し、新政府の陸海軍にもイギリス製の武器・艦艇が使われたことを意味している。

つまり、日本の軍国主義の形成にイギリスが果たした役割が大きいだけに、イギリスは道義的にも日本軍の中国での戦争犯罪に対して、傍観者の立場をとることは出来ないと、カンタベリー大主教は主張したのである。

くしくも、同時期に賀川が日本軍の中国侵略を批判した謝罪伝道が、彼の国際的な名声を背景にしてイギリスと中国の新聞報道等で伝えられていた。

金丸裕一氏の調査によると、中国では『興華週刊』（第34巻 第28期）に「賀川豊彦為日本軍閥懺悔」という日本の官憲から反戦嫌疑がかけられても致し方無い題名の記事が掲載され、イギリスでも反軍閥の言動が『英国大英週刊報』（1937年5月6日号）に掲載され、また、それが中国の『佈道雑誌』（第10巻、第10・11期 1937年10月1日付）に「賀川豊彦対於中日関係主張」という題名で転載されている⁹。

これらの報道に、カンタベリー大主教の抗議声明が加わることは、日本に対する否定的な国際世論が高揚することになり、もはや、外務省の立場にある天羽にとって賀川の謝罪伝道に対してこれ以前のように無頓着な態度で臨むことは出来なくなっていた。

それ以前の外務省は、国際連盟脱退（1933年）によって世界の孤児になった日本を国際社会に復帰させる工作に躍起になっていた。とりわけ、イギリスとの関係改善は緊急課題であった。その布石として、日本での布教活動で著名なイギリス国教会の教師パークレー・バックストン（Buxton Barclay Fowell, 1860～1946年）に対して、彼が再来日した祭に丁重な扱いをしている。彼の祖父は、紙幣に肖像が描かれた著名な国会議員で彼も貴族の称号を得た名士で、彼は政権との間に太いパイプをもっていると見做されていた。

バックストンは、1890年にCMS（英国国教会海外伝道局）の宣教師として来日し、翌年島根県松江市の国教会司祭に任じられ、所謂「松江バンド」と称される信徒集団を立ち上げたことで知られ、再来日して神戸聖書学校（神戸市垂水区塩屋）で教鞭をとっている。

日中戦争期、バックストンは牧師を引退し母国で隠棲していたが、盧溝橋事件（1937）後半に招かれて再々来日し、半年にわたって日本各地で伝道講演をおこなった。彼が十月に上京し講演会をおこなった際には、先述した福島国五郎司祭が司会を担当している。

その折、彼は、第一次近衛内閣の外務大臣の広田弘毅から次官を介して官邸に招かれ、日本でのこれまでの伝道の労をねぎらわれたという。子息ゴッドフレー・バックストンが編んだバックストンの自伝である『信仰の報酬』には、1937年の訪日時バックストンに対する日本

外務省の歓待に拘わる興味深いエピソードが記されている¹⁰。

外務次官御夫妻が父に面会する公的の接待を官邸で催され、外務大臣(広田弘毅)や他の官吏や基督教名士たちも出席していた。彼らはこの接待はかかる時機に日本に来ての奉仕と、長年の生涯の働とに対して父に謝する為に政府によって催されたものであると告げられた。

なかでも文言の中に“かかる時機に日本に来て”とある意味は、日中戦争を示唆している言葉であり、カンタベリー大主教の日本を批判した声明が出された時期と重なる。また、この時期の対支情報部長は天羽英二である。彼も歓迎会に参列したと思われる。

因みに、ゴッドフレー・バックストン氏は、戦後も日本とは関係をもっていて、昭和37年に賀川と同労者の金井为一牧師が渡英した際には、金井を招待し親交を深めている¹¹。

広田弘毅外相・外務省員等が、彼を官邸に招いて慰労したのは日中戦争の勃発によって悪化した日英関係の改善に大きな働きをしてもらえることを、彼に期待したからであろう。

しかし、二年の歳月は日本を取り巻く国際状況を一変させた。日本は、英仏・国際連盟との関係改善の外交路線を捨て、ファシスト政権との軍事同盟に路線変更した。

賀川は、この日本の外交方針の変化を敏感に察知し、これに素早く対応している。日本政府から敵性教会のレッテルを貼られた日本聖公会を庇うために、福島国五郎司祭に国策に準じる立場表明を宣言する説教録を発表させているのである。

例えば、先に紹介した『神の国新聞』に掲載された「イスターの瞑想—基督の復活—」の文章がそれである¹²。

「イスターの瞑想—基督の復活—」日本聖公会神田基督教会牧師
 「時の徴象」。…。今や東亜に真の平和な新秩序を建設する為に皇軍将士は「たとひ我死のかげの谷を歩むとも禍害を恐れじ」と断乎進軍を続けて居る。死んで生きるのである。一粒の麦地に落ちて死なずば唯一つにてあらん。若し死なば多くの果を結ぶ可し」と。…。「主は誠に蘇り給へり」。…。皇国の為め一身を献げた多くの戦死者の遺家族達の癒し難い胸の悲痛も、思は過去のものなれど不断に新しい現在の涙も。唯此復活の信仰によってのみ拭い得る々事を我らは確信するものである。
 「往きて…教へよ」。主イエス・キリストの指示し給ふ所は単に地中海の遙か向ふのみではない。「汝ら往きて…弟子となし…且つ教へよ」と主は今や向きを東に変へ印度のヒマラヤ山脈を越え蒙古の大砂漠を横切りて東亜を指し厳かに宣給ふて居る。此の大使命に必ず可きものは誰か。我等大和民族の基督者にあらずや、我らは内にも外にも漸やく春光の指して来た事を感じる。絶好のチャンス…。

この文章は、天羽書簡から一か月後に書かれた福島国五郎司祭による戦没者の家族への慰安のための追悼説教文である。文面の中で、戦死者への悲痛をイエスの復活に絡めて、あたかも信仰の殉教者であるかのように称賛しているのは、戦争を翼賛したものである。

また、日本聖公会でも、盧溝橋事件以後、敵性教会として迫害を受けることを恐れてか、教団の公式文書で「今回の事変は聖戦だ」とまで言い切って、日中戦争に賛同を表明しているのである。ここに至って、日本聖公会は、カンタベリー大主教と袂をわかって信条を異にする宗教活動に向かうことになったのである。

結語 信仰の行方

日中戦争が泥沼化し、日本がファシスト勢力との結びつきを強め、軍国主義を鮮明にして国際世論の逆風に曝される戦時下、賀川の日本軍の侵略行為を詫げる中国での謝罪伝道は、日本政府・外務省にとって日中戦争以前のように国家的ではない個人的な宗教的活動として見過ごすことが出来なくなっていった。

『賀川豊彦宛天羽英二書簡』が書かれた1939年当時、賀川は自ら「国際連盟至上主義者だった」と告白している。だから、彼はファシスト政権との同盟が日本を破滅の道を歩ませることになると結論し、天羽にドイツへの接近を思いとどまり、中国との直接的な対話外交を実行すべきとの“メッセージ”を、福島牧師を通じて送ったのである¹³。因に、芳澤謙吉（外交官、犬養毅の娘婿、1874～1965年）も、ナチス幹部の差別的体質を指摘している¹⁴。

ところが、賀川の中国との対話の有効性を説くために引いた胡漢民に対する認識は、戦争回避への焦燥感からか、真意の曲解を通り越して完全な改竄の域にまで至っていて、中国の情報を収集していた天羽には真実味に欠けるものであったであろう。

米澤和一郎氏は、中国民衆に向かっての賀川の謝罪が反軍部という内容であったにも拘らず外務省から制限されなかったのは、一部の信仰者を対象とした宗教的なものと見做され、彼の中国への謝罪伝道に対する欧米での反響には無頓着であったと指摘されている。

しかし、日本外務省は、広田弘毅外相時から、聖公会のバックストンの来日時の歓待にみられるように、外交折衝を有利に進めるため聖職者を利用している。つまり、外務省は、賀川豊彦に対して無頓着というよりも懐柔工作の役割を背負わせていたのである。

ところが、日中戦争の泥沼化によって、政府・外務省の賀川に対する態度は変化した。『賀川豊彦宛天羽英二書簡』に秘匿された天羽の本音は、カンタベリー大主教の反戦平和活動を痛罵することで、婉曲なかたちではあるが、賀川の日中戦争時下における軍部批判と謝罪を止めさせることにあったと推定されるのである。

注

- 1 米澤和一郎氏「賀川豊彦の戦時下における侵略謝罪の意義」『賀川豊彦研究』31号, 1996年. 賀川の姉の栄の嫁ぎ先が天羽英二の実家であり, そのため天羽とは縁戚の誼で両者は意見交換の機会をもつことが多かったようである.
- 2 昭和五十九年 [1984], 天羽英二日記・資料集刊行会, 天羽大平編.
- 3 『日本キリスト教歴史大事典』(教文館, 1988年)「福島重義」参照. 賀川は『神の国新聞』第三十号(1938年8月3日)に写真入りでブックマンを紹介し, また自らも同グループの機関紙『改變生活』に寄稿している.
- 4 福島重義『オクスフォード・グループ運動』「序文」(新生堂版, 1935年).
- 5 池田誠氏『中国現代政治史』第10章「国内革命戦争の展開」(法律文化社, 1965年)に, 「広東の政府は, 英・米と接近している南京政府に対抗する必要から, 日本に接近しようとした。」とある. 胡漢民は, 南京政府にあって立法院長の立場から, 蒋介石が国民党の政治主導を排して独裁体制を構築するために, 1931年5月に制定した『中華民国訓政約法』(89条)に反対し, 胡漢民派は反蒋介石派の軍閥と連携して広東に国民政府(5月28日)を樹立していた. 池田誠氏によると, 広東の国民政府は, 『中華民国訓政約法』に否定して『訓政時期約法』を公布し, 一時期, イギリスとアメリカと親密な南京政府と対抗するため日本に接近しようとしていた. 広東政府は, 外交部長を日本に派遣し, 孫文の「大アジア主義」を根拠に外相幣原喜重郎らに説いて満洲問題を解決しようとしたが失敗している.
- 6 『民国胡展堂先生漢民年譜』(台湾商務印書館, 1981年).
- 7 『雲の柱』(昭和九年四月号).
- 8 八代崇『新・カンタベリー物語』(聖公会出版, 1987年).
- 9 金丸裕一氏の賀川豊彦関係中国語雑誌・新聞記事史料(暫定版)金丸裕一編 立命館大学経済学部 金丸裕一研究室 2016年6月. 金丸裕一氏の調査報告によると, 日中戦争直後に中国の新聞・雑誌に掲載された賀川に関する記事は少ない. わずかに『興華週刊』(第34巻・第41期)に掲載された「賀川豊彦近迅」があるのみである.
- 10 ビ・ゴッドフレー・バックストン著, 小島伊助訳『信仰の報酬』(バックストン記念霊交会発行, 1954年)294頁.
- 11 『金井為一著作集』③, (キリスト新聞社, 1977年).
- 12 『神の国新聞』第一千四十二号(昭和十四年三月二十九日号).
- 13 賀川は, 「武蔵野の森より」『雲の柱』の最終号(昭和十五年十月)で述べている.
私は国家多端なる際, かくの如くして当局を煩はしたことを洵に相済まなく感じている.
… 私は国際連盟に日本が止まっている間, 国際連盟至上主義をもって貫いて来た. それで今度の事変に於いても, まだそうした思想のみ抱いていると思われるのは当然である.
- 14 芳澤謙吉『外交六十年』(中公文庫, 1990年)161~163頁. 日本がドイツ・イタリアとの間に

防共協定を結んだものの、ドイツがソ連邦と「独ソ不可侵条約」（1939年8月23日）を締結したことは、当時の平沼騏一郎首相に「欧州情勢、複雑怪奇なり」（8月28日）と言わしめたほど青天の霹靂であった。また、芳澤が訪欧した1936年10月にドイツで時の外相コンスタンティン・フォン・ノイラート（Konstantin Von Neurath, 在任1932～1938年2月）と会談した際の談話が残されている。

午後六時外務省にフォン・ノイラート（外務）大臣を訪問す。彼は失業者は以前六百万人あったが、現在は八十万人に減じ、それも不具者が多いため実際は失業者なしと云ってよい、と説明した。

一瞥して、ノイラートの自国民の障害者に対する侮蔑的な発言が読み取れる。つまり、日本が「日独防共協定」、「日独伊防共協定」を結んだ相手国であるドイツの外務大臣は、このような人権意識の低い人物であったのである。これからして、ナチ党政権の外務省の中枢部に有色人種に対する差別の意識がなかったとは思えないのである。

補註 賀川は、同年インドで開催された世界宣教大会に参加するため前年に離日する。この際の紀行文の「香港より」（『雲の柱』1938.11.21）において心情を吐露している。

香港につきました。今度の旅は色々な意味で苦しい旅です。祈ってください。…。支那に来ると東洋の将来が一層暗く感ぜられます。ただ神に祈る外、道はありません。

また、南京事件の報に衝撃を受けた賀川は、インドに向かう直前に弟子の真鍋頼一を南京に派遣して、彼の地での暴挙（「南京事件」）の惨状を視察させ、その報告を受けていた。真鍋は、「南京から」（『神の国新聞』昭和十三年、五月二十五日号）には、次のような報告が紹介されている。「北支中支へ行かれた真鍋頼一氏より本紙（『神の国新聞』）編集主任への消息の一つ。…。南京は全市崩壊恰も関東大震災の跡の如くです。」とある。

さらに、賀川は、翌年に側近の黒田四郎牧師を南京に向かわせている。黒田は、著書『人間賀川豊彦』（キリスト出版社、1970年）222～223頁において次のような回想を記している。

昭和十四年十月末出発して、私は南京におもむいて、日本軍が余り無茶をしないように、中国人教会を日本軍から守るように働いた。

賀川は、1938年11月にインドで開催された世界宣教大会後の往路で上海（17日）のメソジスト教会と香港の教会で謝罪を行っている。その題目は「支那に謝罪する」であった（「夢の対米交渉 半生の記」『読売新聞』1953年11月9日付）。

An Understanding of a Letter from Eiji Amau to Toyohiko Kagawa

HAMADA Naoya^{*}

abstract

This essay discusses a letter that Eiji Amau sent to Toyohiko Kagawa, on February 27, 1939. This letter is Amau's a response to an earlier message from Kagawa, dealing with complex wartime diplomacy. There is no-prior research on this letter. Only two people knew the contents of this letter. In the letter, Amau thanks Kagawa for introducing him to Priest Fukushima. Priest Fukushima is Sigeyosi Fukushima. He was the leader of the Oxford movement in Japan. Amau is angry that the Bishop of Canterbury criticized Japan's invasion of China. According to his statement criticizing the Bishop of Canterbury, the comprehensive policy of the Ministry of Foreign Affairs towards the Episcopal Church had changed. What we can understand by comparing the letter with diaries was that Amau was pleased that the UK had approved of Spain's German-supported military regime. Perhaps similarly he hoped that Germany would support Japan's occupation of Manchuria. The Japanese Ministry of Foreign Affairs would have had the same idea. Kagawa had told Amau that Germany was discriminatory towards Japan, but that an influential person in the Chinese government, Hu-Hanmin, had indicated that China would give Manchuria to Japan. In fact, Hu-Hanmin did not say that China would cede Manchuria to Japan. It was Kagawa's misunderstanding, wrote Amau.

Amau wanted to advise Kagawa not to side with the League of Nations and the Bishop of Canterbury. Kagawa apologized to China for the crimes of the Japanese Army. But Amau wanted Kagawa to desist from this. Amau was worried that Kagawa opposed Japan's policy. From this letter I wonder if we can read the anguish of the lurch toward war.

Keywords

Eiji Amau, Toyohiko Kagawa, Bishop Canterbury criticized Japan's invasion of China, Spain's military regime and Manchuria, Apology for China of Kagawa

* Correspondence to: HAMADA Naoya
Part-time Lecturer, Kansai University
3-3-35 yamatemati suite Osaka 564-8680 Japan
E-mail: hamachan@m4.kcn.ne.jp